

二〇二六年(令和八年) 一月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇三卷第一号

村野次郎創刊

香蘭

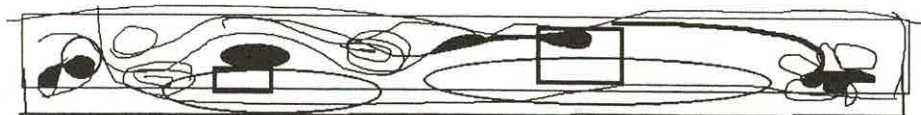


2026年(令和8年)1月号

第103卷

第1号

通卷1141号



香 蘭

2026年(令和8年)1月号
第103巻 第1号 通巻1141号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(125)	加瀬喜美江	表二
招待作品 奇数月連載⑭ 雲のしっぽ	加藤英彦	2
作品		4

一	26
二	32
三	38
推薦香蘭集	39
香蘭集	16

社 告(昇格)	17
香蘭基金 御礼	18
作品一 十首選(十一月号)	20
作品二・三 十首選(十一月号)	22
村野次郎への旅(189) 昭和期の「香蘭」(二十四)	24
続・酔風船(25) 短歌の寿命	25
一頁公論(56) 風土記のこと	25
エッセイ・自由研究「草原の輝き」を思いながら	42
焦 点(十一月号) 想像と妄想の世界へ	44
作品評(十一月号)	46
作品一	48
作品二	50
作品三	52
香蘭集	54

七 首 抄(十一月号)	森幸子・八木橋洋子・富田勝子・高嶋憲子	55
緑 地 帯	江口・藤本・大美賀・手島	54
明宝研会第一六九回 十月例会 杉浦翠子 人と作品(前半)	高嶋憲子	60
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向		68
歌会及び会合・会員消息・他		73
編集後記・新宿日記		79
令和八年度 香蘭賞 作品募集		表三
表紙絵……山口蓬春「柚子」		和雄
目次・緑地帯カット		和田

本物のやうな造花を卓に置き

誰か見誤るかと思ひつつ楽し

『村野次郎歌集』

この歌は『村野次郎歌集』（先生がご存命中に刊行された歌集）の「卓の造花」の一首である。昭和三十八年、先生が六十九歳の時の作品。先生の心の動きが「誰か見誤るかと思ひつつ楽し」の表現に強く浮き出されていて、自分にとってはおもしろい歌である。思わず笑ってしまうような、暮らしの中での豊かさが感じられる。

いかにも本物のような造花は、遠くからは本物にしか見えないのであろう。近寄って、よく見たり触れたりしなければ本質を見極められない事もある。卓上の花を見た人の中には見誤る人も多くいたのであろう。先生もその中の一人であったかも知れない。そして過去に私も何処かで見誤った一人である。

新しい年を迎えるにあたり、真実を見抜く事の大切さ、余裕のある豊かな暮らしについて考えさせられた。新しい年を是非、楽しみたいものである。

雲のしっぽ

太古にも描かれていたか目も口もうすく笑いていたる三日月

あれはだれがくれし忠告あの山のむこう薄氷のような月出づ

一片の骨ものこさず逝きたりと言われて英霊たちが目を上ぐ

試してるようなくちぶり見抜かれている口角のうすき反りにも

だれも望まぬいくさ仕掛けて極北のおとこ真冬のエクササイズ

D組の石炭ストーヴあかあかと胴のふとさに熱を放ちぬ

だれも見えてくれなかったか幼年のプーチンが描きためし父の絵

さみしさの袋にちさき穴あけて漏れだす吐息のような私語たち

夜を裂きてすすむドローンの目がうごく森ふかく弾薬庫が息づけば

母の指のかたちかあれは尾を曳きてひろがるひと刷毛のしろき雲

先日、常用していた処方薬が切れたので病院に向かう途中、国立駅近くのブックオフで閉店在庫一掃セールをやっていたのでふらりと寄ってみた。訪れたのは初めてだけれど、二階建ての店舗で相応の広さがある。すでにほとんどの書架は空であったが、単行本や文庫本、コミックなどすべてが十冊百円であった。学生のころ神田にあった詩歌専門の古書店の店頭には、歌集数冊がビニール紐で結ばれて三百円で売られていたのを思いだす。いわゆる見切品のゾッキ本扱いである。その後その古書店はビニール専門の店に変わった。

ブックオフには、予測していたけれど歌集や詩集、文芸評論の類いはなかった。それでも知らない著者や読んだこともない本が山積みで、恥ずかしながらわたしは自分の読書がいかに狭く偏っていたかを反省した。

百田尚樹や橋下徹の文庫本まである。嫌いなので絶対に買うことはないが、その隣の二冊分ほどが空いていて、百田尚樹の顔を表紙にした本がこちらを覗いている。わたしは慌てて他の文庫本二冊をもって来てその空間を埋めた。百田尚樹の顔は消えた。

一時間ほどもいたろうか。ふと中野孝次の

『清貧の思想』の背が淋しげにこちらを見ている。『実朝考』や『プリューゲルへの旅』、『絶对零度の文学——大岡昇平論』、『若き木下尚江』その他の評論集など数冊がわたしの書架にもある。ここで百田尚樹の向かいの棚で売られているのは何とも申しわけない。手に取ると二百円と表示されていた。

買ってそのまま帰ろうとしたが、『女盗賊ブルーラン(下)』がその近くにあった。インドカースト制度の犠牲となった盗賊団の女首領で、その後彼女を輪姦した男たちを全員射殺して復讐を果たし、出獄してから国会議員となつて性差別運動に取り組んだブルーラン・デヴィの著書である。最後は自宅前で凶弾に倒れてしまうが、二十年ほど前にわたしは彼女の映画会を企画したことがあった。いや、下巻だけ買ってどうするとも思ったが、ふと懐かしくなって購入した。これも二百円。

最後は、読んだこともない阿川佐和子の新書本『聞く力』百円、これは自省をこめて購入。三冊で五百円は安いと思つてレジに行くと、十冊なら百円だけれど三冊なので六十円だという。一冊二十円。なんとも申しわけないような複雑な思いでその書店を後にした。

四 選 者 の 作 品

昭和を遠く

平塚 千々和 久幸

きみとわれの真実すこし齟齬するを知らぬふりして同じ酒飲む
スマトラのコーヒーを飲みしばらくを瞑目したり遥けき父よ
手品師かピエロか知らずリアルには遠き卵を机上に立てて
不本意なドラマを演じているような逢いにて時雨は長く止まず
軒に降る雨を眺めて三日目か天気予報も時には当たる

流行り歌が教えてくれしわが昭和いつしか遠く来てしまいたる
からつきし駄目だと首を振りながら伊之助が来る酒瓶さかびんを提げて
生きてりやあどこかで辻褄は合うものさ敗者復活戦はこの先

「口」の字

横浜 渡 辺 礼比子

夏疲れ癒ゆるともなき夕間暮れつくづく鳴けるつくつくぼうし
復活を待ちいしものを空席のついに埋まらず君逝きにけり
歌会の会場にひとり先に来て机を「口」の字に並べいましき
「手術台の上の無力な時間」とぞ詠みにし君は口惜しからんを
かの日わが窮地を救いてくれし友庄司建造逝ってしまえり
これ以上がんばるまいと思ふとき東京湾の汽笛響かう

本を読むわれを見下ろしちちのみの父は言いたり 手暗がりだよ
都内より稲毛に出かけ潮干狩りせしよ全員鉢巻締めて

父のフィールド(一) 鎌倉 高 畠 憲 子

この世でもあの世でもなきフィールドに父は遊ぶか 手紙が来ない
元氣だから何も心配要らないと一行だけの葉書が来たる

二つほど年下で乙羽信子似です父が施設で出逢つた人は
九十三歳きゅうじふさんが九十一歳きゅうじふいちと文通す よかつたね父さんチエさんがゐて
施設にて父と文通してくれるチエさんは父の母によく似る

「ヨタヘロでもがんばつて生きる」とメモをする父さんの秘密少しわかつた
(チエさんへ)とわが差し入れる羊羹が亡き父君のお供へとなる

父九十三歳きゅうじふさんの女友達チエさんとちよつと笑へる内緒話す

一年が逝く 我孫子 丸 山 三枝子

秋空のどこまでも秋 初物の甘栗もちて訪ねくる友

文化祭短歌大会二つ済みこうしてそうして一年が逝く

勉強とクラブ活動に精を出す中学生の齊藤太一

思ひ出のように立ちいる山法師 夕焼け色に稔りたる実よ

喪中葉書に母の白寿の享年を記しているなり手元あやうく

太りたい我と痩せたい連れ合いと量る体重 気休めなれど

夕さりて驟雨きたりぬ 恍惚のうちにくる死のありて羨しも

びゅうびゅうと声たてて吹く冬の風ゆくべき道を迷うか風も

作品一 十首選



(十一月号作品から)

千々和 久 幸 選

・夏のあさ木の葉が次つぎ降り来たりいつか一人になる時が来る

桜井 京子

下句の何とも切ないフレーズの前で足が止まった。「いつか一人になる時が来る」という漠たる不安と恐怖を先取りした箴言のような下句は、これだけで独立した詩として十分に通用しよう。

むろん作者は上句に序歌的な情景を配して丁寧の下句へ誘導するのだが、読者の目はもう一足飛びに下句に釘付けになる。それほど下句が際立っているのだ。極論すれば、短歌も詩として一行の魅惑的なフレーズが575777のどこかに織り込まれていければいい、ということになる。

例えば上句は「冬の朝庭の木に来て鳴くツグミ」としても下句はびくともしまし。この辺の呼吸はこの作者ならとつくにご承知の筈である。

・草むらに夢見るように咲いているナガミヒナゲシ毒が少々

丸山三枝子

わたしはかねがね「毒のない歌、毒にも薬にもならぬ歌は詠むな」と言ってきた。この場合の毒とは批判精神の謂である。さりながら

この一首は、そんな議論の遠くで詠まれた抒情歌。

ヒナゲシは虞美人草。この一首は結句の「毒が少々」で抒情歌をアイロニカルな世界へ捻転させた。だからこの歌をちよつと悪戯として結句を「波音を背に」とでもすれば、毒は消えよう。

しかしそれではスパイス抜きのスパゲッティみたいなもので、食べた気がしなくなるだろう。この呼吸を忘れまい。

・この人もあの人も死んだといながら夫と見ている昭和のドラマ

渡辺礼比子

「死ぬのはいつも他人」で「見ているドラマは昭和」という設定だから、読者も気楽に読める歌。つまりは死者を詠んでも死の重量が抜き取られているから、軽妙な仕上がりになった。昭和への思い入れも深入りはせず、時代の記憶だけを掬い取っている。

わたしたちは常々令和の現在と過去の昭和との間を行ったり来たり、浮いたり沈んだりしながら「遅いなあ、死よ」などと呟いているのだ。願わくば素敵なラストシーンを迎えたいと念じながら。

・どん詰まりで笑ふはふだん泣いてゐる奴だと言ふが ねえアマリリス

石井 雅子

箴言風に言うならば「最後に笑う者もつともよく笑う」だが、この歌の狙いはそんなところにはない。難しい上句を上手に去なしながら、結句の身の穢し方を御覧じろ、と言わんばかりの歌。この詠み口はわたしの周辺ではもうパターン化しており、第一同人なら自在に詠みこなせよう。

勘ぐればこの歌、何となく評者の詠み口を茶化しているような趣があつて、思わず「本家より上手いねえ」と唸った。ま、おちよくられる内が花！、か。

・どこへ行くといふあてもなくどれも押すエレベーターの行先ボタン

鈴木 桂子

短歌は事実を模写すればいい、というものでもなからう。事実であらうとなからうと、その歌が読者の胸に刺さればよろしい。このような嘘臭い歌（一）をさも本当のように詠めるところが（事実かも知れぬが）、今年度の「香蘭賞」受賞作者の力量でアル。

真実は事実より虚構の中にある。こう思えばもつと自在に言葉を転がすことが出来よう。思い悩み生き惑う者の心の底には、いつもこんな思いが錯綜しているのだ。

・またいつかこの世は悪い冗談と肩をすくめて私に言つて

中村かよ子

一読してこんな上句が易々と口を突いて出るのはこの作者以外にはあるまい、と直感した。「この世は悪い冗談」などと哲学者顔負けのフレーズが、まるで歌うように出て来るところが凄い。

そして「そうなんだよな、お互いさまその悪い冗談を生きているんでは」と、半信半疑にさせるところが憎いではないか。それを詩のセンスなど言つて仕舞えば勝負ありだが、紛れもなき詩人のセンスである。あ、これを言つてはいけなかった！。それを言つてしまえば「努力」という崇高な「言葉」が死語になるから。

・夏つばき友なき家の庭に咲き夕べに散りぬ昨日も今日も

岡野 甫江

ここまで詠んだ歌に比べるとこの一首、体感の綺麗な歌で短歌の正道を行く作品と言えようか。いかにも手慣れた歌でどこにも難はないが、結句を安易にまとめ過ぎた感は否めない。ここは事実を越えてもうひと捻りしたいところだが、これからがなかなかの難所。

夏椿は別名沙羅双樹で、この歌にそこはかかない雰囲気を与えている。結句を一度ばらして例えば下句を「夕べに散りぬ何ごともし（く）」等々さらに言葉を宛がって踏み込みたい歌。

・背の高きひまわり見ておりクレームの電話に始まる職場の一日

川原 優子

職場の朝、作者は窓の外のひまわりを見ながら今日これからのスケジュールを思案中だ。傍らで同僚がクレームの電話に右往左往している、という場面か。やれやれまた忙しい一日が始まる、これで今日の行く先が思い遣られることよ、と眩しながら。

この歌も正述心緒ではなく、二句切れの歌。軽いスケッチに見えるが、一連には仕事の意義を問う歌もあつてそう気楽ではない。

・深酔いで戻りし息子は豆腐色ちずるさあと二階の妻呼ぶ

江口 絹代

どことなくサザエさん家のようなドラマが読者を楽しませてくれる。意地悪く読めば案外、二階の妻も酔っ払ったフリをして夫の声に「知らぬ顔の半兵衛」を決め込んでいたりして、と読むのはきつと漫画の読み過ぎ。「豆腐色」は苦心の表現だが解り難い。

・明日こそ、明日こそと呟けばさうか、さうかとカラスが笑ふ

大井田啓子

わが町にもカラスが増えた気がするのはこの歌のせいかな。名付けて「明日こそカラス」、進歩は無限だとするこの発想は、高度成長期の名残。「今日より明日を」というスローガンのもとに、サラリーマンが生産性向上運動に狩り立てられたのは昨日の夢。それにしても罪作りな「明日こそカラス」ではある。

作品二、三十首選



(十一月号作品から)

桜井京子 選

〈作品二〉

・広島に下宿する時祖父言いき「ピカにかかわる男は避けよ」と

小笹岐美子

「ピカ」は「ピカドン」の略で原子爆弾のこと。原子爆弾投下後の広島では、原爆症はうつるという根拠のない偏見があった。差別や偏見は無くなったが、当時の状況は被爆した人々をさらに苦しめていたのだった。

情報の錯綜する時代の最中であって、国民の多くは世の中で起きていることを冷静に把握するのは難しい。だが、この作者は常に問題意識を持ち続け、批判精神を失わなかったことが窺える。

・炎天のさざ波橋にすれちがう俯きがちなヒジャブの人は

竹本 幸子

「ヒジャブ」はイスラム教徒の女性が被る布のこと。炎天下をこのヒジャブの人は、何処へ行くかとしているのか。ちらりと見えた表情から、何か陰鬱な気分を作者は察したのだ。日本で暮らす外国人は、現在三百五十万人以上とも言われる。言葉や慣習の違いから苦労も多いことであろう。

「さざ波橋」は千葉市に実在する橋で、近くに出入国管理施設があ

る。行きずりに出会った女性の境遇は知るよしもないが、作者の心に小さなさざ波を立てて過ぎて行つたのである。

・ただ一人の男の妻ををはること今朝はまぶしい曙光を浴びて

田中あさひ

縁あつて夫婦となり、長い結婚生活の果てに辿り着いた感懐が、「ただ一人の男の妻でおはる」ということか。もとより才気煥発の作者であつてみれば、何ものかになろうと懸命に生きてきたことは想像に難くない。一連の作の中には「それこそが見事な一生」「何ものにもなれなかつた」といふヒロイン^{ヒロイン}があり、人生を肯定的に捉えようとする意志が感じられる。

黎明に射す眩しい光は、これからの作者の人生を祝福しているかに見える。残り時間を見据えたと、この先まだ何があるか分らない。

・御裾分けと友が吾が手にそつと置く信玄餅は望郷の味

富田 勝子

「御裾分け」は、よそから貰つたものを知り合いにさらに分け与えることを言う。友は作者が山梨県出身と知つてか知らずか、名物の信玄餅をくれたのである。ちなみに「御裾分け」は「裾分け」の丁寧語で、「すそ」が着物の末端部分を指すため、「つまらないもの」の意味となり、目上の人に対しては「御裾分け」というのが適切だとか。「御裾分け」であれ「御福分け」であれ、作者には懐かしい信玄餅。甘い蜜のかかつた信玄餅を頬張る作者が見える。

・黒板に今も遺れる父の文字「子どもらが来ルラシイ……」

中井 房江

「帰郷」の連作中の一首。空き家となつて久しい実家の黒板に、今

も残る父の字は、在りし日のままそこで時が止まったかのようなようだ。

「子どもらが来」と予定を書きつけ、そのあとに「ルラシイ……」と続けた父は、どんな思いであったのか。来訪を心待ちにしていたはずの父。事実のみを述べた歌だが、作者の切なさが伝わってくる。

・あの日からずっと鳴いていたような八月六日蟬しぐれ降る

中村 陽子

八月六日は、言わずと知れた広島に原爆が投下された日。平和記念式典の模様がテレビ中継される中、聞こえてくるのは激しく鳴き立てる熊蟬の声である。昭和二十年八月六日も広島は暑い日だったと聞く。あの日も同じように熊蟬が鳴いていたであろう。彼の地の悲惨な出来事を思い、平和への静かな祈りの感じられる歌である。

・男でも女でもないでで虫のジェンダー論は虹色めくや

藤本佐知子

でで虫、つまり蝸牛は雌雄同体の生き物という。雄でありかつ雌の機能も併せ持った、不思議な生き物なのだ。近ごろ盛んに言われる「ジェンダー論」は、これまで普通に口にして来た「男らしさ」「女らしさ」に疑問を呈する考え方のこと。だが、そんな小難しい議論はさておき、作者はここで何が言いたかったのか。

三句までを序詞と考えたと、言いたいのは下句の方で、昨今の性的指向や性自認の煩雑さを揶揄しているとも取れる。また、虹色は多様性の象徴でもあるから、性差を越えた「LGBTQ」に良き未来あれ、そんな思いかも知れない。でで虫に翻弄されている気分だ。

・夫逝きて時に流されわれの身に想い出だけが爆ぜてゆく夏

安田 恵子

夫を亡くした後の喪失感を歌い続けてきた作者。時が心の空白を埋めてゆくかと思いきや、なかなかそうもいかないらしい。残された身には、在りし日の思い出だけが無限ループとなって繰り返されるのだ。だがこの歌の眼目は、結句「爆ぜてゆく夏」にあり、作者のエネルギーの源泉はまだ涸れていないことが窺える。

「奔放に生きてもみたし 思いきり吹いて飛ばしたあざみの冠毛」という歌もあり、自身の短歌によって新たな生きる希望を見出していると感じたい。

〈作品三〉

・インディア紙^{ペーパー}一枚一枚めくりゆくこの感触に「霊」の字を引く

川久保百子

インディアペーパーは、辞書などに使われる不透明度が高く、丈夫できめの細かい用紙のこと。三浦しをんの小説『舟を編む』でも、辞書に使う用紙の選定に細心の注意を払う場面があるが、重量のある辞書では軽いことも重要な条件とされている。

作者は「インディア紙」と題した一連で、漢和辞典を広げて楽しんでるのだが、一枚のペーパーに霊験を感じ取ろうとしたのかも知れない。この歌に選ばれた「霊」の字も効いている。

・暑がりの夫は真夏に逝きたれば墓参の我等を苦しめており

原 トモ子

生前は暑がりだった夫、亡くなった後は暑い中の墓参となり、また遺族は苦しめられているという、皮肉な歌である。だが夫は意図して真夏に亡くなったわけはなく、恨み言もまた愛情の裏返ししか。とはいえ、ここでは近年の猛暑が災いしているというべきだろう。

村野次郎への旅（189）

昭和期の「香蘭」（二十四）

千々和 久幸

前号では「歌人の超然的態度の可否」というアンケートを読んできたが、書き切れないところが残ったので引き続き読んでいくことにする。

○半田良平

御質問の意味がはつきりしませんが、歌人同志の間で超然的態度を取つて顧みまいとすることか、或いは文壇に働きかけようとする積極的な態度に出でないことを指すのか、その解釋によつて、種々考へられませう。前者の意ならば、私はさういふ態度はいけないと思ひますが、後者の意なら、誠に致し方ないことだと考へてゐます。また一方で各人の性情にも根ざしてゐることですから、一概に可否を定めてしまうことも出来ずまい。どうも微妙な問題ですね。

○吉植庄亮

無職のをりは閑にまかせて花鳥風月に心を

遊ばせ、政治記者となつてはその記者の歌をよみ、百姓になつた今は百姓の歌をうたつてゐる。現在人である私はいつも現在人としての歌をよんでゐます。

○加藤介春

歌人も詩人も市井に下りて來ねばならぬ。彼等は一介の農夫であり商人であり又労働者でもあらねばならぬ。大俗ならねばならぬのである。しかし私のいふ大俗は大聖を兼ねたものでなければならぬ。大俗にして大聖なるもの、大聖にして大俗なるもの、それが優れた詩人であり歌人であると思ふ。もしその超然的態度といふのが大聖なるが故に―であれば歌人詩人はよろしく超然的であるが、いゝ。しかし又大俗なるが故に超然的であり得ないものならば詩人歌人は超然的であつてはいけない。

○永田龍雄

するやつはさせて置き、しないやつはしない、のです。所詮はその人々の生活趣味だから何と言はうがかゝはりのないことですね。放つて置きやし、あほらしい。

○尾上篤二郎

超然として自ら高しとすることはどの道あまりよいことではありません。げいかうすることもどうかと思ひますが。もう少し世の中へ出ていつて多少とも文運の貢献に盡力することが必要かと思ひます。どうも餘りに専門的であり過ぎるのは歌壇のみではない様ですが、もう少しお互いに交渉を持合ふやうに心掛けてもよろしいからうと思ひます。

○土田杏村

志想は超然たる可し。生活者としての時代感に決して超然たるべきものでない。否超然たるを得ないものだと思考致します。

○宇都野研

現實に即し、そして現實から離れる。それが藝術の本道でせう。最初から現實をわきによせたものに吾々を動かす力があり得やうとは思はれない。超然的態度と云ふ事がその意味であるならば、可否を論ずる迄もない事だせう。しかし現實を藝術化すると云ふ事は其

れから離れる事です。その態度をも超然的と云ひ得るならば、眞の藝術家は皆さうだと云へる。之亦可否を論すべき事ではないでせう。

○石井拍亭

超然的態度と云ふのがどう云ふのを指すのか具體的に解らないのでお答へしかねます。

歌人に限らず藝術家は皆或程度迄超然的なる可きかと思ひます。

○山田邦子

歌人に限らず其人の生れつきの性格から或は固い自信から俗衆に入りまじらず超然的態度をなしてゐる人は又味がありますが、現在の大方の超然主義者はむしろ及ばぬ負け惜しみから反抗的超然主義をとつてゐる嫌が感じられます。それは浅ましい事です。

○岡野直七郎

お尋ねの超然的態度とは、世評などに關心せず自らが信ずるところを歌ひ通すといふ意味かと思ひますが、これについては一概に可否を論ずる事は出来ないと思ひます。一通り歌の修業をした、素質のいい、人は世評など意に介せずとも價値ある歌を作つてゆきますし、又活字にあらはれた批評を受けなくともつま

しい、歌をのこしていることになります。然

しだ歌を愛してはゐるが生來の鈍根者は、世評によつて刺戟をうけ、發憤もして、自分の歌を少しづつでも、よくしてゆけるのですから、あまり世評を無視し白眼視するのは、その人の成長をとどめ、變に偏つたものにする虞があつてよくないと思ひます。結局人によりけりだと思ひます。

○矢代東村

日常生活に對してか、作歌に對しての問題か問題の範圍がはつきりしてゐない。どつちにしろその人の性格による。一概にはいへない。早い話が當今の歌人についてみても、誰々は超然的であると分けて見た所で、仕方もあるまい。要は眞作品の製作にある。その爲めに必要なら超然可。不要なら不可。どうです。うまい事をいふでせう。

○中河與一

歌人はよろしく超然的態度であるべきでありませう。大體があ、云ふ純粹な藝術様式を選び乍ら尚ほ且つ世間的になる等といふ事は困難と思ひます。滔々として世俗に走る世界に超然たる歌人の一群がある事は彼方の星尚ほ雲海の彼方ある美しき星を思せるものです。

○杉浦翠子

福澤諭吉先生は「武士は喰ねど高楊枝」といふ封建時代の思想を戒めたので、私を世話をした人もこの主義だから、私の歌人振りが超然主義に見えて厭がつて居ります。

○内藤鑑策

あまり超然的態度でひい^ッないやうですぜ。そりや相手にしてくれないから仕方がないんぢやないのですか、われわれもその組であつて欲しいのだが。然しなかなかぬけ目のない人格者が多いね。われわれはお手並拝見してゐるぶんさ。これからうんとやつつける氣もあるし、今更相手になるに當らないとも思ふし、まあ、ゆつくり年でも越してからの話さ。

以上、長々と引用したが百家争鳴で、歌人全体の意見は見定め難かつた。それというのも読めば読むほど質問の主旨があちこちにバラけて受け取られ、收拾がつかないからだ。ま、その分、回答者の立つ位置や姿勢が見えてソチラの方がわたしには興味深かつた。締め括りに村野次郎先生の意見を次号で紹介しよう。

短歌の寿命

短歌に賞味期限や寿命はあるのだろうか。わたしがこれまでにしばしば引いてきた「時代は感受性に運命をもたらし」というフレーズの語源は、堀川正美詩集『太平洋』（1970年、思潮社刊）所収の詩、「新鮮で苦しみおおい日」に拠っている。

短歌には時事詠という分野があつて、あえて言えばこれには「賞味期限（いわゆる旬）」か寿命がありそうだ。なぜなら短歌（文学）の批評では「時代の後追い」は厳しく批判され、何よりも「予見性」が大事にされるからである。

こんな古くて新しい問題を思いついたのは、平野啓一郎『あなたが政治について語る時』（2025年8月、岩波書店刊）の中の、「死後の作品」と題した一文を読んだからである。

そこには故瀬戸内寂聴から聞いた話として、こんなエピソードが紹介されていた。「今の作家の本は、もう残らないね。私の本も、死んだら読まれなくなる」という一節を。わたしは一瞬、身震いした。ならばいったいわたしの短歌はどうなんだ、と。

短歌人口は減ったと言われるが、結社誌や短歌総合誌には毎月多くの作品が掲載され、歌集も引つ切りなしに刊行される。一方で廃

刊や隔月刊、季刊が増えそれをわたしは「結社誌の受難時代」と先に書いたが、夥しい作品が毎月量産されていることに変わりはない。瀬戸内寂聴に戻れば、「今の歌集は、もう残らないね。あなたの歌集も、死んだら読まれなくなる」ことは間違いなからう。

それでも短歌が手放せないのは、いったいどういうことなのか。かつてわたしの詩の先達で詩誌「沙漠」（ここには高橋睦郎もいた）の主宰者麻生久は、「オレが詩集を出さなかつたら、家の一軒くらいは築に建つたらう」と言つた。詩歌を趣味というのなら、これほど高くつく趣味もあるまい。

「死んだら読まれなくなる」どころか、生きていうちだつて無視か黙殺される短歌を、歌人はせつせと詠い継いでいるのか。わたしはと言えば寺山修司の口まねをして、「短歌は生理への弁明」だからと居直る（？）ことにしている。生理現象ならば理由もへつたくれもなからう。「上品な趣味ですわね」と冷笑されようとも、「お金の掛かる道楽ですわね」と蔑まれようと勝手だが、所詮は「自己満足」に過ぎないことは承知の上。となれば「死んだら読まれなくなる」ことは、当然の成り行きとして甘受せねばなるまい。

わたしが大学に入学した年、教授にして文芸評論家として高名な中村光夫教授がある日、法学部に出講された。法学部だから文学の基礎知識はあるまいからという大学側の一般教養の一環だったと思うが、講演の後、質問はないかと問われた。わたしは挙手をして「センセイ、文学が古典として残る条件は何ですか」と聞いた。中村教授はたつたひと言「それは運です！」と言われた。

わたしは当時、この答の意味が解らなかつたが、今なら短歌に引き比べてその意味の「深遠さ」がよく解る。

一頁公論

(56)

風土記のこと

杉山 伊都子

一昨年、「うたのみなもと」を調べた時は「古事記・日本書紀」が元になった。その時風土記にはどう書かれているのだろうと思った。しかしそこまではいけなかった。今回は風土記を調べてみようと思い、図書館に行った。借りた本は次の五冊である。「風土記探訪事典」(日本書紀下・風土記)「うたの起源考」(国文学論集)「日本古代論集」。

この探訪事典の中に「風土記という古典が忘れられているのはモッタイナイ」と書かれていた。風土記は千年以上前に官の命によって採録・編集された地方諸国の国状報告書である。これは中央の地方対処の指針となる意味合いがあり、地方の整備が進むとある時期の部分は不要として、しまいこまれ残り残っている風土記は次の五ヶ国で、常陸国(茨城県)播磨国(兵庫県)出雲国(島根県)肥前国

(佐賀県・長崎県)豊後国(大分県)である。この中で完全に残っているのは出雲国のみである。なおこの五ヶ国以外に他の文献に引用されて一部分残ったものに「諸国の逸文」がある。それは、尾張(愛知県)伊勢(三重県)山城(京都府)丹後(京都府)摂津(大阪府)備後(広島県)伊予(愛媛県)筑紫(福岡県)筑後(福岡県)である。

勅令が求めた風土記の内容は一、群郷の名に好ましい文字(漢字)をあててつける。二、群内の鉱産物・動植物については品目の名をつける。三、土地の良否の程度を記す。四、山川原野の名稱の由来。五、古老の伝える古伝承の五項目で、完成については常陸と播磨の二国は発令の和銅六年(七三三年)から間もなく完成し、出雲は天平五年(七三三年)である。肥前・肥後は初め日本書紀の資料となった報告書があり再註して出来たとみられている。なお風土記は全て漢文で書かれている。

以上のようなことから風土記は歌謡にふれることは少ないとわかった。その少ない中から拾ってみると常陸国風土記には歌垣(燿歌)として「筑波嶺に逢はむといひし子は誰が言

聞けばか神嶺あすばけむ」「筑波嶺に慮りて妻なしに我が寝む夜は早も明けぬかも」が載り、ついでの香島群の童子女の松原の項に少年少女の恋かとも言はれる「いやぜるの安是の小松は木綿垂でて吾が振り見ゆも安是の小島はも」(小島はお嬢さんの意)「潮には立たむと言へど汝夫の子が八十島隠り吾を見ざ走り」が載っている。これは五七七七の形になっている。よく知られているヤマトタケルのミコトが常陸から甲斐への帰路を回想して「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる」とうたったのに対して火を灯す老人が「かがなべて夜には九夜日には十日を」と続けたのも載っている。

出雲国風土記には地名の由来・国引き神話・黄泉比良坂の話・出雲大社成立の神話・玉造温泉・猪目洞窟(黄泉の穴)美保関等各地のことが載っている。各風土記の内容をここに書けないのは少々残念である。

日本各地の旅——日本古代遺産(風土記)の地をめぐるというのはどうだろう。残念ながら私の故郷(武蔵国風土記)は見当らなかった。今は「紫にほひし武蔵の野辺に……」という東京市歌を思い出すばかりである。